

緑爽会会報 No. 196

2025年2月26日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 荒井正人



デザイン・制作 関塚貞亨

〜〜 《報告》 〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

1 月山行 江戸の最古の谷中七福神を巡る

小林 敏博

実施日：2025年1月8日（水）
参加者：20名（後掲写真参照）

昨年、新宿山の手七福神に続き、今年は江戸時代から続く最古の七福神といわれる谷中七福神を巡った。遠方から参加された田村さんと平野さんを含めて参加者は20名。初春の行事への大人数の参加は今年で30周年を迎える会にとって幸先の良いスタートとなった。

JR 田端駅北改札口に集合時間の30分前にまず現れたのは地元の川嶋さん。「歩けなくなったら途中で歩いて帰りますから」とお元気な声で言う。電車は数分おきに到着するので、五月雨式に皆さんが集まり10:25には全員が揃った。日の当たる駅前で今日巡る七福神や田端文士村について簡単に説明、新たに入会する山内さんを紹介してスタートした。大所帯なので最後尾を石塚さんをお願いする。駅前の道を左へ田端切通しを緩やかに下っていく。6、7分で右へ入ると福祿寿を祀る、真言宗豊山派の東覚寺（とうがくじ）に着く。さして広くない境内にはいくつもの仏像が置かれている。本堂には福祿寿がご開帳されていて皆さん、順次お参りをした。東覚寺では本堂右の護摩堂前にある赤紙仁王と呼ばれる石造金剛力士像が有名だ。体の悪い場所に赤紙を阿形像、吽形像の順に貼ると病が治るといわれており、快癒すれば草鞋を奉納するしきたりのようで、像の脇にはたくさんの草鞋が納められていた。正月明けの2体の石像は地肌が見えないほど赤紙で真っ赤になっていた。（次ページの写真では赤がよく見えないかもしれませんが）東覚寺から先ほどの道に戻り谷田橋の交差点から谷田川通りに入る。この通りは名前が示すとおりかつては不忍池にそそぐ川だったが今は暗渠となっている。谷田川通りを外れると静かな住宅街が続く。10分ほど歩いて左手に西日暮里駅を望む広い道灌山通りを渡って細い道に入る。入口に六阿弥陀道と刻まれた石碑が立っている。行基菩薩が彫り上げた六体の阿弥陀仏を安置する江戸六ヶ寺を巡る六阿弥陀道の一部

目次

ページ	
	《報告》
1.	1 月山行 江戸の最古の谷中七福神を巡る 小林敏博
4.	2 月山行 秩父 宝登山 横関邦子
	《寄稿・投稿》
6.	ロンブクから見たエヴェレストの一枚の絵 芳賀孝郎
8.	最高地点・三角点へのこだわり《2》 六百山 南川金一
9.	兄のピッケル 夏原寿一
10.	4500 冊の蔵書整理を依頼されて 吉田理一
11.	緑爽会入会のご挨拶 山内通
	《予告など》
12.	3 月講演会 4 月総会と講演会・懇親会 会員異動
	別紙 この一年を振り返って

のようだ。その小道を1~2分進むと左に恵比寿神を祀る青雲寺がある。臨済宗妙心寺派の禅寺らしく落ち着いた境内には滝沢馬琴の筆塚と硯塚があった。道灌山を背負うように本堂が建つ。江戸時代は山の向こうは入江だったという。お参りを済ませて次の寺へ向かう。

青雲寺から数分歩くとピンク色の塀に地元の童画家吉田健一氏のユーモラスな布袋尊姿を描いたタイルがいくつもはめ込まれている修性院（しゅしょういん）に着く。本堂に上がる参拝者がいく人も並んでいる。

履物を脱いで本堂に上がると本尊左側に時代を感じされる布袋尊が安置されている。江戸時代、この辺りは「ひぐらしの里」と呼ばれて江戸近郊の行楽地として青雲寺とともに修性院は『花見寺』として賑わったという。六阿弥陀道をそのまま進むと左手に道灌山へ上る富士見坂の表示がある。ここで荒井さんが富士見坂、道灌山にある諏方神社の話や芳野満彦の実家があったことなどを説明された。

さらに5分ほど歩くと人が行き交う谷中銀座の夕焼けだんだんという階段の下に着く。下町の雰囲気を味わおうと谷中銀座を下りよみせ通りを左へ、大通りに出る手前でさらに左に折れ『ロ』の字形に歩いて夕焼けだんだんに戻ることにしてハーモニカの吹き口のように並んだ小さな店の賑わいを覗きながら進む。途中、岡倉天心旧居跡が記念公園になっているので、そこでトイレ休憩。人数を数えると一人足りなくなっていた。小部さんが見当たらない。だんだんが見えるところまで戻ると小部さんがその階段を下りてくる場所だった。「谷中銀座でメンチカツを買っているうちにはぐれてしまった。元に戻ると聞いていたので待っていました」とのこと。一安心して先に進む。

夕焼けだんだんを上って谷中せんべい店を見送ると真正面が日暮里駅で、線路越しの右手前方にはスカイツリーが現れた。線路脇の細い道を上野方面に少し進み紅葉坂を上った左にあるのが毘沙門天を祀る、天台宗の天王寺。本堂手前右側に毘沙門堂があり、伝教大師最澄自刻とされる毘沙門天像が納められてる。寺のすぐ前に広がる谷中霊園は、江戸時代には天王寺の墓地だったらしい。谷中墓地にあった、幸田露伴の小説で知られる五重塔は昭和32年に炎上して現在は案内看板とその跡しか残っていないが、燃え残った下層部の残材を使って毘沙門堂を再建したという。境内には『元禄大仏』と呼ばれる釈迦牟尼如来坐像（露坐）やいくつもの庚申塔など見るべきものが多い。

天王寺から谷中墓地内に延びる正面の広い道は往時、天王寺の参道だったという。途中、その五重塔の跡を見てから角に交番のある十字路を右へ進む。墓地を抜けた突き当たりにあるのが寿老人を祀る、臨済宗妙心寺派の長安寺である。行脚の老翁が谷中に留まり長安軒という小堂を建てたのが始まりといわれている。狭い参道を進んで本堂へ上がると徳川家康が納めたと伝えられる寿老人像が安置されている。時代を感じさせる像である。本堂前には狩野芳崖翁碑が建ち墓地には芳崖とその妻の墓もある。

昨12月、今回の七福神めぐりの案内をご覧になった夏原さんからメールをいただいた。戦時中、東京大空襲でご自宅が焼けて半年ほど谷中の多宝院の“離れ”に仮住まいしたとのことで、地図で



東覚寺の赤紙仁王（下は普段の様子）



確認すると長安寺から次の護国院へ向かう途中にこの寺院があることがわかり、コースに組み入れることにした。長安寺を右へ行き信号を渡った左手の広い道を進んだ右に多宝院がある。新しい寺務所が建っている場所にかつて“離れ”があったらしい。夏原さんに大変だった 80 年前の思い出を語っていただいた。手入れが行き届いた境内は奥行きがあり、立原道造の墓所でもある。

多宝院を出てまっすぐ南へ進むと東京芸術大学に行き当たり、大学の塀に沿って右へ 100m ほど行くと大黒天を祀る東叡山寛永寺護国院に着く。寛永年間、天海僧正の命を受けた生順が建立した寛永寺最初の子院。境内に天海が建てた釈迦堂の別当寺となり、東叡山釈迦堂とも呼ばれている。大坂夏の陣・冬の陣で戦死した豊臣・徳川両軍の霊を弔うために執り行った大念仏法要の際に徳川家光から国の護りと人々の福運を祈願して鎌倉時代の藤原信実筆とされる大黒天の画像が奉納され、以降、護国院の大黒天として信仰されるようになった。谷中七福神めぐりはこの画像と天王寺の毘沙門天立像などが庶民の信仰を集めたことから発展していったともいわれている。豪壮な本堂に靴を脱いで上がると須弥壇の脇に黒光りした大黒天像が安置されている。残念ながら信実筆の画像は貴重なもののせいか見ることはできなかった。

護国院を出て左へ7つ目の神様・弁才天を祀る寛永寺不忍池弁天堂へ向かう。都立上野高校の校舎と運動場の間を通る清水坂を緩やかに下っていくと動物園通りに出会う。上野動物園の塀に沿ってさらに下り、道が平坦になると前方右側が不忍池である。観光客や参拝客の数が一段と増えて賑やかだ。そのまま進むとすぐに右手に不忍池弁天堂がある。天海僧正の『見立て』という手法に基づき、不忍池を琵琶湖に、元々聖天が祀られていた池の小島を琵琶湖の竹生島に見立て、竹生島の宝巖寺（弁才天信仰の聖地）を見立てたお堂を建立、宝巖寺から弁才天を勧請して創建された。通りから弁天堂までの広い参道には出店も並び平日にもかかわらずかなりの参拝者が行き交って



(中・後列、左から) 夏原寿一、石塚嘉一、平野紀子、小部正治、大島洋子、横関邦子、小林敏博
栗城幸二、岡義雄、山内通、川嶋新太郎、富澤克禮、中原三佐代、島田稔
(前列、左から) 夏原夫人、荒井正人、田村佐喜子、辻橋明子、鳥橋祥子、岡田陽子

いた。お堂の手前には屋根を隠すほどの奉納された提灯が掲げられている。弁天堂へ上がる階段の手前から並んで参拝を待つ。お堂には9月の大祭の日のみご開帳される秘仏・八臂（ぱっぴ）弁才天が安置されている。8本の腕で煩惱を打ち壊すといわれている。

お参りを終えて弁天堂を背に賑やかな雰囲気の中で集合写真を撮る。川嶋さんや申し込みの際に完歩できるかなと言われた大島さんを含めて全員が七福神めぐりを無事に終えることができた。その後、上野広小路の居酒屋でさらに懇親を深めた新年でした。皆さん、お疲れさまでした。

行程：JR 田端駅 10:30→10:38 東覚寺（福祿寿） 10:50→11:05 青雲寺（恵比寿神） 11:15→11:18 修性院（布袋尊） 11:25→11:35 谷中銀座 11:55→12:05 天王寺（毘沙門天） 12:20→12:30 長安寺（寿老人） 12:40→12:45 多宝院 12:55→13:00 護国院（大黒天） 13:00→13:20 不忍池弁天堂（弁才天）

（写真：石塚嘉一、小林敏博）

2月山行 秩父 宝登山

横関邦子

実施日：2月14日（金） 参加者：8名（写真参照：写真も横関さん）

前日は寒く、夕方のニュースでは関東地方でも風で木が倒れた、工事現場の足場が崩れたなどが報じられ、北風がものすごく冷たい日だったが、翌2月14日の宝登山山行当日は風も収まり、空には雲もなく真っ青で素晴らしい天気となった。秩父鉄道の野上駅に集合し、長瀨アルプスから宝登山に登り、蠟梅の花を見て、長瀨の駅まで下り、解散するコースである。参加者はいつもの馴染みある仲間と、緑爽会の新メンバー山内通さんの8名。

宝登山へは、駅からすぐに歩いていけるコースである。長瀨アルプスの登山口まで舗装された道を15分ほど歩き、萬福寺のところで左に曲がり、このお寺の前を通って奥まで行くと民家の間の奥の方に登りの道が繋がっている。

難しい道ではないが、最初は山への登り口なので急登が続く。落葉樹



（後列左から）横関邦子、富澤克禮、小林敏博、小部正治、山内通
（前列左から）川口章子、岡義雄、鳥橋祥子

の雑木林に囲まれた山の中で歩きやすい道である。ペース配分を考えながら、おしゃべりしながらゆっくり歩く。途中登山道が私有地を通る場所があり、通行料（環境保全のため）を100円入れてくださいという看板とポストがある。分かれ道には、しっかりと道標がたっているの、道しるべに従い登りと下りを繰り返す尾根道を歩く。天狗山の分岐、氷池の分岐、野上峠、小鳥峠と歩いていくと、周りの木々の葉は秋に落ちたまま枝だけになっているので、下の景色も垣間見える。陽の差す場所は明るく、あたたかく、日の当たらない場所に来ると木に囲まれちょっと暗く、気温は少し低い感じがする。

小鳥峠を過ぎ、しばらく歩くと林道になる。ここまで来ると宝登山の登山口までもうすぐということらしいが、アルファルトの道のせいか、20分ほどの道が長く感じる。向こうのほうに看板らしきものが見えてきて、近くまで来ると「毒キノコ注意」の看板がある、ここが宝登山への登山口である。ここからは足元が悪い急登になり、頂上直前では、200段ほどの階段がある。時間を見るとほぼ12時なので登山口からちょっと上がったところで昼食。休憩し、エネルギーを補充して、最後の階段に挑戦。



足の長い外人向けかなあと思いたくなる段の高さで、階段横の土の部分に足を置いてから次の段へと登る。50段ほど登ると平らな道があり、また50段ほどで平らな道というように4回の階段があり、これを登りきると頂上。全員そろって登りきり、お疲れ様!!!

頂上(497m)からは武甲山や両神山など右から左まで、山並みが全部はつきりと見える。また頂上には、ロープウェイで登ってきた大勢の人もある。子供連れ、ペットの犬と一緒に、年配のご夫婦、女性の友達同士など、大勢の人たちが蠟梅の花を見に来ている。頂上近くの早咲きの蠟梅は見ごろを過ぎた感じもあったが、中段くらいの大勢の蠟梅は見ごろで、ロープウェイの駅に近い場所では、まだ黄色の真ん丸の蕾の木も多数あり、しばらく花を楽しめそう。3000本の蠟梅からほのかな香りが漂ってきて心地よい。

頂上から少しずつ下りながら斜面に植えられている蠟梅の黄色の花を觀賞する。花の内側の花被片が赤茶系の色のものが蠟梅で、花びらから花芯まですべてが黄色一色のものはソシンロウバイ(素心蠟梅)と言う外来種とのこと(富澤さんより説明)。意識してみると確かに両方の蠟梅が混在している。またロープウェイ駅のそばの斜面には福寿草の花が黄色の小さい花を咲かせていた。

ここで早春の花を楽しみ、一休みしたのち、つづら折りの下山道を下りた。幅の広い、歩きやすい道だけれど、ところどころにまっすぐ下りられるショートカットの道がある。本道を40分ほど歩くとロープウェイの山麓駅につき、宝登山神社を經由し、そこから長瀬駅まで歩く。予定コース時間より30分ほど早く長瀬駅に着き、駅の踏切のそばのお蕎麦屋さんでビールを飲んで一息入れ、それぞれ帰途に就いた。

この長瀬アルプスは、2022年3月の「山」(922号)にも紹介されており、長瀬在住の山岳会のメンバーがヨーロッパ・アルプスへ遠征した時の感動から、秩父にもアルプスをと「長瀬アルプス」のコースができたとのこと。今回はその紹介記事と同じ野上からスタートし、正面の山に向かい萬福寺を目指した。この記事に書かれている長瀬アルプスのコースと、今回の山行で歩いたコースとを読み比べると、氷池分岐には「腰掛けたくなる大きな岩がある」とあるが、道標しか気が付かなかった。野上峠と小鳥峠は廃道になってしまったとあったが、歩きやすい道が続いていた。「氷池分岐から先は左右に大穴が現れる。ロープが張られ、以前、『蠟石』を鉛筆状に削り長瀬土産として売っていた原石の採掘跡」との記載があり、確かに黄色のポリエチレンの紐が張られた場所の先に苔で一面おおわれた大きな穴があった。800mの林道、「毒キノコ」の看板、足場の悪い急坂と、長い階段の裏参道、その急な道が終わると宝登山の頂上で蠟梅の花が迎えてくれるというのは以前と変わっていない。季節を変え、梅の花やつつじのころ、夏には名物のかき氷や長瀬の川下りなど、「長瀬アルプス」で山歩きを楽しみながら、ほかにもいろいろ楽しめそうな場所である。

ソマヴェル（1890～1975）は稀にみる才能の持ち主であった。多くの登山歴の持ち主であるばかりでなく、伝道指導外科医であり、画家であり、音楽家でもあった。

画家としては英国の湖水地方の風景画家として有名であった。1924年遠征ではチベットでたくさんスケッチと水彩画を描いた。その多くは英国山岳会で保管されている。その中でも油絵で描かれているエヴェレストの山なみは写實的に表現されているのは素晴らしく、更にチベットの雰囲気をかもし出すチベットの風景が魅力に溢れている。この絵の印刷製作はケンデルのフランク・ピーターとヒートン・クーパーの協力に依るものである。

出版は英国山岳会と湖水地方のロッククライミングクラブとで行った。この事業はエヴェレストで亡くなった25名のシェルパ、6名の英国人、2名のグルカ兵とその他6ヶ国の人々の追悼と敬意を表したものである。

出版物の販売した収益は1955年エヴェレスト財団基金となった。その基金は世界中の山岳登山隊の遠征、調査のサポートとして設立されたと記されている。

このソマヴェルのエヴェレストの絵は岳父三田幸夫の書齋に飾っていたものであった。1991年岳父が亡くなった時遺品として私にもらったものである。オデルから岳父へソマヴェルの絵を送って来たのは次のような理由があった。

オデルは1924年第3次英国エヴェレスト遠征では登頂を目指すマロリーとアービンのサポートをし、マロリーとアービンの最後の目撃者であった。

彼はエヴェレスト山頂への稜線上の最後のピラミッドの岩峰の基部に二つの黒点が動いて近づいているのを見た。その後まだ岩壁の下にある二つの黒点が見えたがその時雲がかかり二つの黒点は見えなくなった。現在も二人は登頂したのかどうか謎であり、不明のままである。

オデルは1936年ナンダ・デヴィ（7816m）に初登頂、1938年にはティルマン隊長のエヴェレスト隊にも参加している登山家であり、地質学者でもある。

そのオデルが1980年来日した時日本山岳会は歓迎会を開催した。その折、岳父三田幸夫はインド滞在中（1926～1932）に1924年エヴェレスト遠征の映画フィルムを購入していたが、その古い記録映画をオデルに見せた。

オデルは映画を見て、驚くと共に感激、大喜びであった。というのは英国山岳会の山岳資料は第二次大戦の空襲でこのフィルムも焼失したからであった。岳父はオデルへ来日の記念として古い貴重なフィルムをダビングしたフィルムを贈った。

後日オデルからお礼の手紙と共にこのソマヴェルのエヴェレストの絵が送られてきたのである。

今年はマロリーとアービンがエヴェレストの頂上を目指して登行してから100年になる記念すべき年である。古いことばかり思い出すこの頃である。

私が生まれる10年前の1924年の話である。

2024年11月記

（当原稿は京都学士山岳会の会報「AACK Newsletter」に掲載予定であったものですが、芳賀会員の承諾を得て掲載しました）

六百山

南川 金一

上高地の梓川左岸に、急傾斜で梓川とへ落ち込んでいる険しい山がある。霞沢岳と六百山である。霞沢岳は 2600m 級であり、2500m 以上の山を目ざしていた頃、徳本峠から尾根伝いのルートが拓かれたと知って、そのルートで登った。2500m 以上を終えて、2400m 級を目指すようになって、幾つかの難しい山が出てきて、その一つが六百山だった。当時、六百山に登ったという話を耳にすることはなく、情報は何もなかった。霞沢岳へ行った時、頂上の少し手前のピークから北へ分岐する尾根の先方に六百山が見えていたのが記憶にあったので、六百山へ行くなれば徳本峠からと考えた。

霞沢岳は夜行日帰りだったので、六百山もそのつもりだったが、そう甘くはなかった。徳本峠と霞沢岳をつなぐ尾根の、六百山への尾根が分岐する 2580m ピーク着 10 時半。そこからは六百山を見下ろすので、尾根の様子がよく分かる。起伏は緩く、険しさは感じられない。しかし、尾根の全面を這松が覆っている。2580m ピークから這松に踏み込んだ。始めのうちこそ踏み跡のようなものがあったが、すぐに消えた。這松は、枝が茂っているようでも、人が多く歩いた所は枝の混み具合が薄くなり、抵抗感が弱くなる。身体を入れてみると、そこがどれくらい歩かれているか分かるものである。六百山へのこの尾根はほとんど歩かれていないことが分かった。

這松に覆われた尾根筋は、遠目にはただこんもりと茂って見えるだけであるが、実際に歩いてみると、小さなピークが次々と現れ、そのピークには登りと下りが伴う。この尾根の場合は、ピークの頭の部分の這松が特に密で、小ピークを乗り越えるたびに体力を消耗させられた。最低鞍部までに 5 つ、6 つの小ピークを越えただろうか。

最低鞍部は 2400m で、2・5 万図の上で見ただけでも、2470m の最高地点までに 4 つのピークを越えなければならないが、実際にはもっと多かっただと感じた。12 時 7 分、最高地点のピークに立つことができた。前方に、より高いピークは見えなかった。そこにも人が来たような痕跡はない。

六百山の三角点は、頂上稜線の北端にあった。北面と東面には這松がなく、明るい頂上だった。2450・1m で、最高地点よりも 20m 低い。梓川の谷の向こうに穂高連峰が素晴らしい。12 時 40 分だった。時間はまだ早いですが、這松を掻き分けながら戻るのは憂鬱である。東面の藪の下に踏み跡が認められた。明らかに人の踏み跡であり、上高地へと下っているようなので、それを下ることにした。

踏み跡を辿って標高差 1000m を一気に下ると、五千尺ホテル前の公衆トイレの裏手だった。14 時半。いつもならバスに飛び乗るところだが、着ているシャツやズボンがボロボロである。晩秋であるから、教科書どおりに着衣は毛の製品だった。しかし、毛の繊維は藪に弱い。河童橋の上は都会並みの人込みである。体を小さくして山研へ急いだ。山研で針と糸を借りて破れを繕い、翌日帰ることにした。

その当時、六百山に登ろうとする者は、年に 2 ～ 3 パーティーもあったのだろうか。上高地から踏み跡を追って登り着いた所が三角点ピークである。最高地点は、さらに南へ 300 ほど這松の藪を分けなければならない。そのこだわりはないので、多くは三角点ピークを踏んで、すぐに引き返しているように思われた。



六百山の稜線と穂高連峰

兄のピッケル

夏原 寿一

私には歳の離れた兄がいましたが、1944(昭和 19)年にインドのアッサム州で戦死しました。この小文は、その兄の使っていたピッケルの話です。



太平洋戦争当時、我が家は両国にあった。その家は 1945 年の 3 月 9 日の夜から 10 日の明け方にかけての東京大空襲で焼けてしまった。私が小学校 1 年生のときである。空襲の火の手が迫ってきて家を出ることになったとき、母が「これを持って」と言って手渡されたのは水のいっぱい入った薬缶だった。後年、その薬缶のことを母に訊くと「関東大震災のときに、飲み水が無くて困ったことを思い出したから」と言っていた。

そんなこんなで命からがら避難して数日後、仮住まいだが一応落ち着いたところで父が焼け跡を見に行ったときにピッケルのヘッドを見つけたので持ち帰ってきた。その表面は高熱で溶けたせいかデコボコだった。このヘッドは長らく本棚に置いてあったが数年前、シャフトを付けて杖にすることを思いついた。それは、いずれは杖が必要になるときが来るだろうからとの単純な思いからだ。が、いささか寂しい思いつきではあった。

ヘッドのサイズは、ピックからブレードまで 29.5cm、ブレードの幅は 5.7cm、シャフトを取り付けるフィンガーの長さは 14.5 cm、重さは 415g。焼けてデコボコになった表面を平らにしようと紙やすりで磨くことにしたのだが、その前に、作者の銘とかメーカー名があるのではないかと表面を注意して探してみたが、それらしいものは見当たらなかった。表面が溶けたときに消えてしまったのかもしれない。

さて、磨き始めてはみたが、デコボコの山の部分から谷の部分までを削り落とすのは容易ではない。そこで、ピックの片面だけを平らにして他の部分はデコボコのまま残すことにした。まずは目の粗い紙やすりの裏に木の板を貼り、水で濡らしながら谷底まで削り落とした。次に、粗削りで出来た表面のキズを目の細かい紙やすりで取り、最後は極く細かい目の紙やすりに刃物手入れ用の油をつけて磨いた。日にちはかかったが鏡のような表面に仕上がった

ヘッドが仕上がったので、次にシャフト用の棒を買いにホームセンターに行った。種類は丸棒と角棒しかなかったが、丸棒ではあまりに当り前すぎて素っ気ないので、角棒を買って角を紙やすりで少し落とすことにした。材はエゾ松。

シャフトをヘッドに取り付けるためにはフィンガーにある 3 つの穴の位置に合わせてシャフトに 3 つの穴を開けてネジを通すのだが、その穴開けがけっこう難しい。というのは、穴は手回し式のドリルで開けるのだが、シャフトに直角方向に正確に開けないと、ネジを入れたときに相対する側のフィンガーの穴の位置に合わないことになるからだ。しかしそこは“工作少年”の知恵と技で完璧な穴を開けた！ 出来上がったシャフトには、むかし使っていた亜麻仁油が残っていたので、それをたっぷり染み込ませた。石突の部分にはシャフトの保護と突いたときの滑り止め用に、円筒形のゴムを取り付けた。このゴムは、故障した家電を処分する際に外しておいたゴム製の足だ。

部品が揃ったので仮組立をしてみたが、焼けて黒くなっているフィンガーを止めているネジのメッキの銀色が目立ってあまりよくない。そこで、ネジをガスコンロで赤くなるまで熱してゆっくり冷まし、表面に黒錆を付けた。これで、ネジはフィンガーの黒になじんで目立たなくなった。

作業は全て終わった。重さは 620g とやや重いが見栄えよく出来上がった。この杖を使うのはまだまだ先のことと思っていたところへー昨年、ギックリ腰になったことで出番が早まってしまった。今は杖の世話にはなっていないが、あまり早く準備をするのも良くないのかなと思った次第である。



*ここで、戦争の話をしただけさせていただきます。

関塚さんと喫茶店でコーヒーを飲みながら歓談しているときに東京大空襲の話になったことがある。私が「私はあの空襲の下にいたんですよ」と言うと関塚さんは即、「よく生きていたねえ」と。横浜大空襲で家を焼かれ、空襲の何たるかをご存じの関塚さんならではの一言だ。そして、焼夷弾はただばらまくのではなく、先ず目的の地域の外周部に落としてから次第に内側に向かって渦巻状に落としていたこと、あの夜の東京の真っ赤な空は横浜からも見えていたこと、その赤い空の下で 10 万人もの人が亡くなったことなどを話してくださった。

『日本山岳会百年史』に水野勉会員が「戦争とは人を大量に殺しあうことである」と書いておられる。また、チャップリンは映画『殺人狂時代』の中で「1 人の人間を殺せば殺人犯だが、何万人もの人を殺せば英雄だ」と言っている。共に至言だ。 (写真提供：夏原寿一)

4500 冊の蔵書整理を依頼されて

吉田 理一

新潟県津南町で数年前他界した A さんのご遺族から蔵書の整理を依頼され、ようやく終了のめどがついた。A さんは大正 13 年生まれ、95 歳でお亡くなりになられた。中山間地の広大な敷地に建つ一軒家の書庫は羨ましいスペースであった。最初に蔵書を数えてみたら約 4500 冊であった。戦争中は陸軍に所属していて真宗高田派の住職でもあり、地元の農業の指導者でもあったことから戦記物、農作物や農薬、親鸞聖人、皇室関係の書籍が目立った。作家別では司馬遼太郎の歴史小説が多かった。

戦争中の軍務は「陸軍気象部中央气象台分室豫報班」で各地の日本軍に天気予報の情報を伝える役割のようだった。軍関係の資料は全く無かった、進駐軍に占領される前に軍隊に関する証拠書類は全て廃棄したものである。

津南町では統合で空いた旧中津小学校の校舎を改装して「埋蔵文化財センター」を建設中で、今年秋には開所予定である。文化庁の補助 7 億円を受けて、一般公開を行なう施設とする計画である。蔵書整理中に津南町教育委員会の学芸員(国学院大講師)が見えられて、郷土史を中心に約 800 冊を文化財センターの蔵書としたいとして引き受けていただいた。残った約 3700 冊は新潟県三条市の出張古書買取専門店に依頼する予定である。この古書店は蔵書の 2 割に古書としての価値があれば全冊引き取るということである。

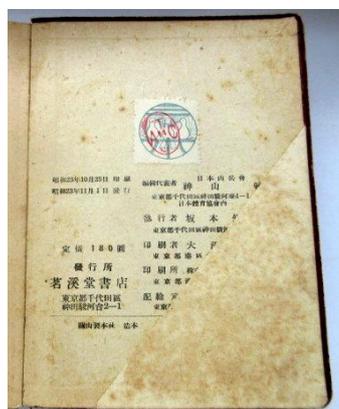
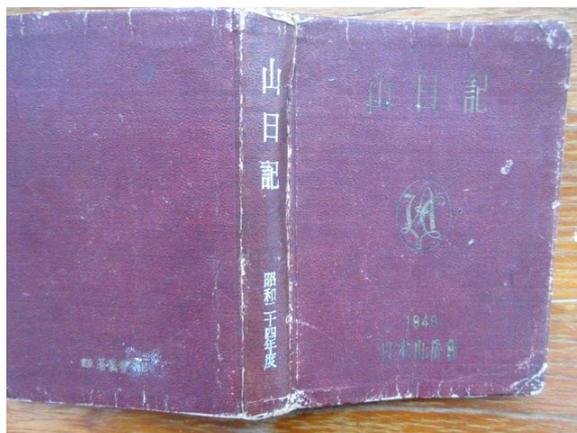
蔵書整理中に A さんの 80 代の妹さんからお話を伺う機会があった。若い頃、兄から苗場山登山を誘われたが、母から「女が山に登るとは何事か」と止められて故郷の山「苗場山」に登ることは出来なかった。兄は昭和 26 年頃結婚して子供が出来た。母親から「山は危険だ、子供ができたから今後登山は禁止する」と申し渡された。兄が大きな涙をボロボロ流していた光景は 70 数年たった今も鮮明に覚えている。

私が期待していた山岳書は殆ど無かった。唯一の収穫は山日記戦後復刻第一号であつた。山日記については「日本山岳会百年史」に、刊行された全 53 冊について詳細な記録が残されている。

この戦後第一号は 14 冊目にあたる。昭和 23 年 11 月茗溪堂書店発行である。南川金一氏の研究によると山岳会当初の会員名簿は「いろは順」でのちに「ABC 順」になったとのことである。この昭和 23 年版は 26 名の編集者が載っているが先頭の藤島敏男から柳田国男まで ABC 順である。

「百年史」では取り上げられていない 23 年版の特筆される件がある。山日記の裏表紙の内側に三角のポケットが付いている。(右の写真) ここに生命保険の申し込みハガキが入っていて、ハガキが日本山岳会に到着した時点で保険が発効する。保険料は全額山岳会負担で、山日記そのものを保険証券とする。初めて知ったことである。戦後間もない時期にこのような知恵を考え出して実行された山岳会の先輩方の偉業に改めて尊敬の念を抱いた次第である。

(写真：吉田理一)



緑爽会入会のご挨拶

山内 通

緑爽会の先輩の皆様、このたび入会させていただきました山内通「やまうちとおる」と申します。

昭和 35 年 1 月生まれの 65 歳です。下町の荒川区南千住に生まれ育ち、就職で八王子に 30 年ほど住んでいました。現在は荒川区に帰ってきていますが、山に行くには以前よりは遠いところなので、八王子に住んでいたときにもっと沢山の山に行けば良かったと思っています。

職業は前職では IT エンジニアをしていましたが 60 歳で定年退職後、公益財団法人東京都中小企業振興公社城東支社に非常勤職員として勤めています。下町 7 区（台東区、墨田区、江東区、荒川区、足立区、葛飾区）の中小企業支援の巡回を行っています。

日本山岳会には小林敏博様からお誘いいただき 2022 年 4 月に入会しましたが、山行などの活動はしておりませんでした。

小林様とは私が学生時代、45 年以上前になりますが、アルバイト先で大変お世話になりました。その後は年賀状のみのやり取りでいたのですが、私が山歩きを始め



編集後記特別版「この一年を振り返って - 幹事団より」

2024年4月の191号から今号で6回、この1年何とか無事に発行できました。会報は原稿が無ければ始まりません。そういう点では、南川さんはじめ、皆さんに原稿を頂戴できたお蔭であり、感謝申し上げます。それと、振り返ってみれば、天候にも恵まれ、山行などの行事もほぼ計画通りに実施してこられたことで、各号に報告を掲載することができました。

また、面倒な会報発送作業には鳥橋さんに毎回お手伝いいただき、有難いことでした。もちろん会計の藤下さんがいてこそその発送ですが。

今年は創立30周年の年です。会報のみならず、皆さまのご協力を様いただきながら、30周年に相応しい充実した一年にしていきたいと思っております。以下幹事からのメッセージ。

荒井正人

日帰り近場の山には行けていましたが、今は足首と腰が痛くて、とても山歩きどころではありません。また秋以降は、図書交換会や、深田クラブ会報作りなどもあって、頭もうまく働かないような有様でした。それでもこうして計画が実施でき、会報も発行し、その上、新たな会員も迎え入れられたことは、会員の皆様のお蔭だと思います。30周年を迎えるにあたって、幹事団で記念事業を考えてはおりますが、皆様からのご意見、ご提案を是非お願いいたします。総会へのご出席もよろしくお願いいたします。

小林敏博

昨年、新入会員オリエンテーションで緑爽会紹介の際に『しおり』を出席役員含めて配布しました。終了後、橋本会長から『しおり』に掲載されているある講演会について、当時の会報を読みたいと言われてコピーをお送りし、後日、会長は図書室にこもり会報の合本もご覧になり「読み応えがありました」とのお礼メールをいただきました。今年は会報200号発刊の年でもあります。山の記録として、また山に関わる文化や交流の記録としていつまでも読み応えのある会報の意義を改めて考えさせられました。皆さまのご協力を得ながら今後も充実した会報作りに努めたいと思っております。

石塚嘉一

マーティン・フッドさんに講演をお願いするのと、フッドさんのことをあるメディアに書くためにインタビューをするので、日本山岳会設立の頃からの先人が書いた山旅の記録、山岳文学を集めた近藤信行氏や大森久雄氏編著のアンソロジーを読み直す機会がありました。30周年の年に、コロナで途絶えた懇談会などが活発になり、集まらない分は会報への寄稿で、会員のみなさんに山や山旅（山歩き）、山岳文化、文学について、山の自然環境についての思いや知見を語っていただければ、緑爽会の伝統（の一部）が続いていくのではないかなと考えたりするこのごろです。

横関邦子

仕事中心の時間の使い方から、仕事以外のことにも多くの時間をとるようにした一年でした。緑爽会のイベントにも参加させていただき、皆様から山の植物、山の魅力、日本の文化など様々な知識を教えてくださいました。木の葉を食べたり、落ち葉や草の中で成長する虫や小動物、そんな虫を食する鳥たち、鳥に食べられずに蛹になり飛び立つチョウなど人間以外の世界として世の中を見た時の面白さにも気が付いた一年でもありました。これからも山を歩きながら自然の大切さに触れ、自然を大事にし、いろいろな生き物に出会いたいと思っています。

藤下美穂子

昨年は緑爽会の活動にほとんど参加できず、会報発送作業や幹事会も休みがちになり申し訳なく思っています。緑爽会の皆さまとの山行ではないのですが、ささやかな山登りが2度できて、プレゼントをいただいたようでした。今年は果たして？皆様とご一緒できたらいいなと思っています。